

合巻『風俗女西遊記』について 其の二

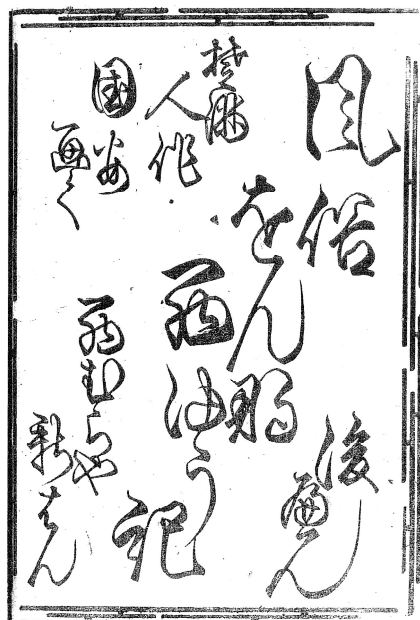
合巻『風俗女西遊記』（国立国会図書館所蔵 請求記号二〇七・二〇〇八）について、次の項目に従って述べる。

- 一 影印と翻刻（後編 十六丁表～三十丁裏 広告）
- 二 今回掲載部分の梗概
- 三 本書の特色―人物について／中断について

〈後編表紙〉



〈後編表紙見返し〉



〈後編表紙〉

狂訓亭楚満人作 歌川国安画

〈後編表紙見返し〉

楚満人作 国安画く 風俗をんな西ゆう記 西むらや新はん 後へん

檜山裕子

十六丁表



十六丁裏

四の巻

つゞき

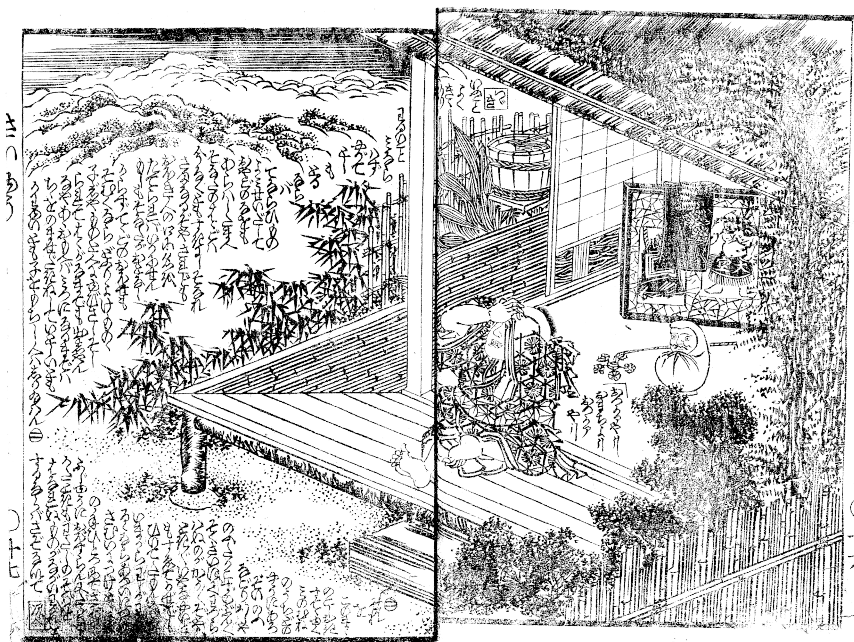
さてもそなれはおつとのるすに たかこをいだきておもてのかた そらうちながめぬたりしが いそがはしくものかげに入り たかこがかほ つれ／＼とうちまもり せきくるなみだはら／＼とどめかねつゝせなか

かきなで そなたもことしでもふ三ツ わしがいふ事よふ聞きやゝ わらはもとより人げんならず これよりはるかひがしなる かうらいこのすいれんどうといふところに 年ふるさるにて此につぼんのあしがら山にうつりて久しくすみけるが さきにとまの承どの かの山にかりし給ふとき わがみちいさく身をへんじ おちぐりひろいてあそびあるを わしといふとりにかいつかまれあやうきいのちたすけられ そのゝちひさしくかはるゝも 何とぞいのちのおやてふ大おん すこしなりともむくひせんとおもふて やかたにとゞまりしがふじにさいなんおこれどもわがちくるいのちからもて およびがたかるわざはひに くやしくもそなれさまはてきのためにうちじにし給ひ そのゝちとまの承どの かしこにてせつぶくせんとし給ふを かりにそなれさまのかたちとへんじ やいばをとめてそのときより もつたいなや 人げんをたぶらかしてふうふのかたらひ すでにそなたといふ子を ▲もふけ そのあいよくにほだされつ 又ひとつにはとまの承どの させるかげうもあらざれば わがみはたおりてなりわひとし いさゝか ■むかしのおんにむくひ 又はそなたがかわゆさに 人となるまでもりそだて そのゝちにこそそのつみを ちたびもゝたびわびことし そのいひわけにはじがいてしなんと思ひぬたりしが けふ思はずもそなれさまのおやこいそ太夫さまの○○○○ ○わがみこゝにあることならず なごりはつきねどわかるゝぞや いまよりもなほおとなしくとゝさまの 次へ

十六丁裏・十七丁表

つゞき

いふことよくきゝかりにも わるいことみならず やがてとしもとるならば てならひものよみせいだして おやこのなをもあらはしたまへ そなたのはゝこは今なくとも すきにしそなれさまなるぞや されどもおほき人の口に名をたてらればいかにせん もしもそなたがおとなしからず てゝこのおほせもそむくなら どふりよけものゝ子じやものと人にゆびさしそしられて



はゝがなまでも出しやんなや あゝおもへばみつになるまでは ちゝをのませ
 だきねして いとしいともかわゆいとも 子をもちし人はしり給はん◎ ◎そ
 れをこのまゝのこしおき すてゝゆくみのむねのうち どのやうにあるぞいの
 ふ なこりおしやのふ たかこずいぶん／＼そくさいにてわづらはぬのがかう
 〳〵ぞや とき／＼いやなやいともすゑて かぜでもひいてたもんなや いま
 からわしがわかるゝなら あつにつけさむいにつけ とゝさまの手ひとつに
 て さぞふじゆうにおぼすらん 又たかこもかたときもわたしのそばをはなれ
 ぬものが ながいわかれをするならば さぞないて

「おつかあや引 おまちよ引 おつかあや引

次へ

十七丁裏・十八丁表

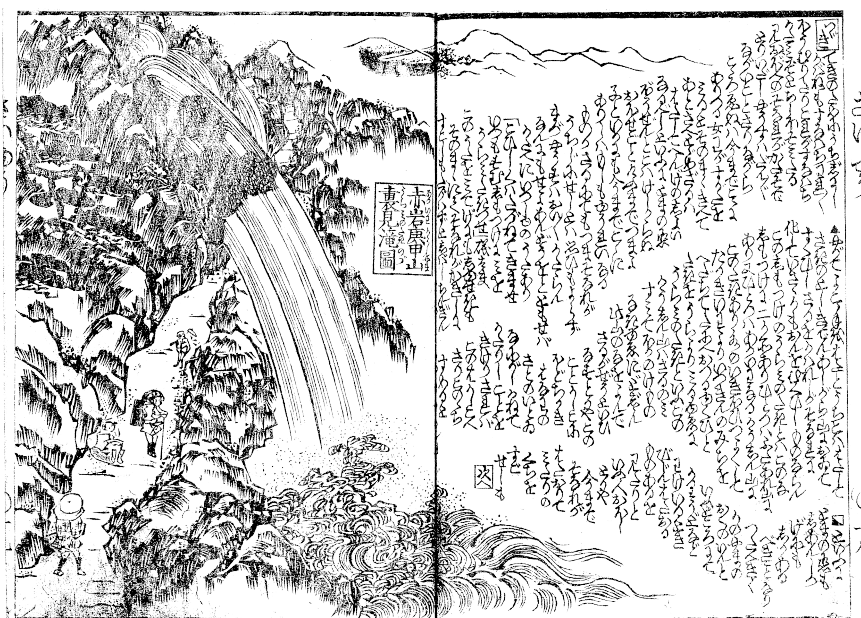
つゞき たづねやせん コレかならずわしがうちにゐずとも ないてたづねて
 たもるなよ おもひまはせばいにともない 申とまの丞さま けふからわしが
 そばにゐずば 今までとちがひあさゆふのいひをかしぐ人もなく水くむ人もあ
 らずして だい一世わたるいとなみも いかにくらうをし給はん どふぞよい
 ぢよちうをむかへて おんみのくらうもうすくして 此子にもさむからずきせ
 てそだてゝ下さんせ かならずおみを大せつに ごきげんよう のち／＼はも
 とのりつばのさふらひになつて ちうぎをあそばすをたのしみにして そのお
 りをまつそのなれのあらいそになみ うつなみだまのあたり とまの丞がある
 ごどく ぐどきつなきつ こゑかぎり 正たいたくもふしつむ たかこもわ
 つとなきいだし おつかあやどこへおいでだ いつウまでもちやんのそばにゐ
 ておくゑよと まわらぬしたにまわさるゝ おやのおもひは八かんぢごく こ
 ほりはものかは はりつめし むねのつかひをなでながら ヨ、よくいふてた
 もつた わがみがそのやうにいふてくれずとも いにともなふてならぬもの
 もふなんにもいふてくれな ア、いつまでいふてもつきぬなこり 申わけには
 じがいて ア、いや／＼はかないすがたをみせるのもいまさらにはづかし



又たかこがゆくすゑもあんじらるれば いつまでもかげみにそひ やさしのまへさまにたづねあはせ なにとぞふたゝびおいへのたつまで しばしいのちをながらへて かげながらまもるべし しかなり／＼とひとりごち すゞりひきよせ すみさへもうすきゑにしとかこつめり かくてはてじとうちくもるむねをおさへてふでとりあげ やみぢをてらすあんどに いつしゆのうたをかいつくる 磯太夫はとぐちにてためらふうちに そなれにちがはず 何やらんあんどによりそふてものかいつけてあたりしかば もしもかれはよにいふなる ゆうれいなどか ませうのものか イヤ／＼世の中にはたる人もおほかれば われらうがんなるものから かはたれどきのほのぐらきに もしみがへもするものかと おもひかねてたつたりしが ともかくうちにいり とふにしかじとひきあくる 戸のおとひゞけばふしぎにも ありつる女のすがたはきへて あしずりしつゝなきゑるたかこ いきせきかへるとまの丞 それとはしらずうちにいりコレ／＼ひのくれるのになぜ火をば やそこにあるは何人じゃ ホ、うら松氏久しぶりの ▲たいめんといふこゑにおどろきて これはしうとこにてありけるか おもひもよらぬらいいんに そこのことばみゆるしあれ これ／＼そなれはいづくにあると いへばたかこはなみだながらおつかあはもふどこへかいつておちまいだよう ちゃんやよんできておくゑとなげば こなたもきをいらち エ、わけもない何をしてといふにいよ／＼ふしんなれば 磯太夫これをとゞめ これ／＼そなたはなんとかいふ そなれはすぎしころ

次へ

「みこうはそのさまじんりにちかく けものもおんをするものを 人めんだもじうしんなるみほのぐんれう しうかをおうれうするの大きい てんのむくふときあらんか ア、ぜひもないことじやよナア
「ちしほそみたる此かた袖 スリヤそなれはうちじにしてけふまで／＼にありつるはまつたくへんげなりけるか
「おちいたんや おいらにもあかいべゞおくゑヨ



つゞき てきのためにうちじにし かばねもすなはちわれ／＼ほうむりたり
 これがすなはちかたみぞと ちしほそみたる見おほへのそなれがたそでとり
 いだし やうすはだん／＼ながいこと さりながらこゝろ多ぬは今までこゝに
 ありつる女 わがすがたをみるとそのまゝきへてあとさへとゞめざるは はた
 してへんげのしよいなるべしと いふにとまの丞ぼうぜんと こはけしからぬ
 おほせこと けふまでつまよ子と いかにも今までこゝにありしはもしもゆう
 れいなるものか さるにてもつまそなれがうちじにせしとは 思ひもよらず
 まづやうすはおい／＼かたらん なんにもせよあんどを ともせばかたへ
 にいつしゆのうたあり 「こひしくは たづねてきませ いつもすむ しもつけ
 にみを うらみたきつせ」磯太夫このうたをみて げにもしゆせきもそのまゝに
 て そなれがかきしにすこしもたがはずと しばしちんぎんしたりけるが▲
 ▲やがてよこ手をはたとうち こははたして さきのとしきでんあしがら山に
 おあてすくひさるをかはれしが そなれに化していさゝかもおんをむくひし
 ものならん このしもつけのうらみのたきとは このなしもつけに二か所あり
 ひとつはふたあれ山にあり 又ひとつはあかいわなるかうしん山にこのたきあり
 り 水のいきほひつよくして たかきいわよりいつきんのみちをへだちてたに
 へおつる ゆくひとたきをうらよりみるゆゑに うらみのたきといふ このか
 うしん山はさるのみすみて ほかのけものなきゆゑに どじん此山のなをよん
 でさるがぜうといひなすとかや このことかしこにほどちかき はなわのさと
 のいとゐなにがし かねてかたりしことをきけり さればこのはかしこへさり
 このうちすめるといふ事ならん■ ■といふにとまの丞もしあんしつ げにも
 しかあるべきことなり つたへきくかのやまのおくのいんといふところにて
 かりうなどわけいるとき びじんはおるものあるを見たりといふ人おほし
 とかや 今までそなれがはたおりてみたりのくちをすこせしも
 赤岩庚申山 裏見滝図

次へ



つゞき 又このたかこのうまれたるも さるのねんげつ日ときまでそろひたるこそ 今おもへばさるのたいにやどりしゆゑか おもひいだせばもろこしのそんりんがつまふんしなるもの さるのへんじてかたらひしも ひをおなじうしてだんずべしちくるいだも おんをしりてかくのごときはしゆせうとすべしとうちかたらひてもろともに そのころばせをかんじ入り ふたりはなみだにくれたりけり まづそのよもふけわたれば そのまゝいぬるおもてのかた 戸をほとくとおとなふにぞ なにごとにやとまの丞戸をあくれば ひとりの男かどべにたゝずみ申やう たゞいまだいくわんしよりきふにこようのすぢあれば せうやのもとまでいますぐにといへば とまの丞ころへてそのよし磯太夫にもがたり ねふりしたかこそがまゝに磯太夫のふところにいれおき つかひの人ともろともにうちつれてこそいでゆきけり おりからあとへ三人 戸をけはなしてばらくとこみいり あんどうばつたりまつくらがりすはくせものと磯太夫がおきいでんとするところを まつぶたつときりつたれり こゝろえたりとぬき合するそのまに ひとりがうしろよりねらひよつてみぎげさにきりさげられてたぢくとよろめくところをつけいり三人にてたゝみかけ ふゐにあわつる磯太夫をみぢんになれときりたつれば おもひよらぬことたといひ ことにたかこをいたはりてけがをさせじとかばふものからはかくしくはたらかれず つひにぬ めすかしよのきづをうけ しりへにだうとたをるれば たかこをおさへてさるぐつわをはませ つゞらのなかへおしいれて やがてひとりのくせものが づきんをかなぐりちかくより めづらしやはま磯太夫 かくいふわれをたれとかする みほのぐんれうひろ氏がかしん くま山まみふもんむねともなり さきにはんぐはんうちじにせしをりから▲わがおとゝむねすけ なんぢがむすめのそなれにれんぼし たすけんとせしをいなむにより よんどころなくころせしを そのほうそこへはせつけて わがおとゝをきりころし そのところを立のきたりし これをむねんにおもふうち われしさいあつてらつにんし■おとゝのかたきなんちをうたん



としよ／＼ほう／＼をたづねたるが こよひこゝにやどるてい さいわひ手
ごわきとまの丞めをたばかりておびきいだし いまこそ 次へ

二十丁裏・二十二丁表

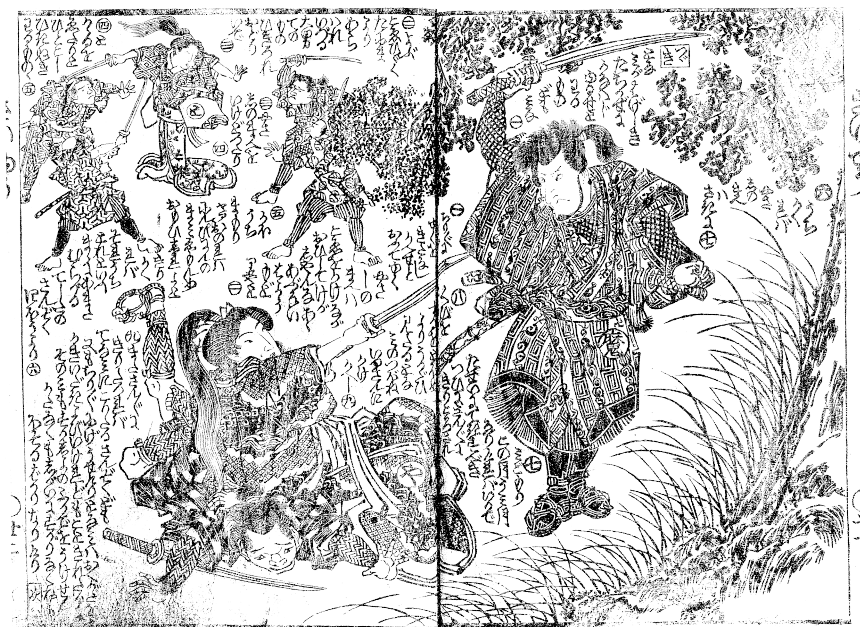
つゞき かたきをうちとつたり またこのこびつちよはさるのねんげつそろひ
しうまれゆゑ しさいあつてめうやくをとゝのへんたためいきをもたづねたる

が こひつがことをきしゆゑ わがたいもふのじせつきたれりとおもふに
さいわひなんちまでおもはずかたきをうちとつたるは いくさのかどでのちま
つり よしじたばたせずともかくのとほりのわがいんどうが みゝにいらばは
やくぢごくへおもむけと ぬぐりまわせば ほとばしるちしほにそめなすしら
なみの たつたの山にあらなくて よはにひとりぞこへてゆく しでの山ぢや
いかならんおもひやるさへあはれなり おしむべしいつこのちうしん 五十八
才をいちごとして このよのゆめをみはてけり こゝにとまの丞はいそぎせう
やのもとへゆくとちうにて むかひのものはまだほかに 〳〵ようじありとて
わかれたれば ひとりかしこへゆきみるに あとかたもなきことなりければ
すぐさませうやのものをたちいで ちうをとんではせかへれば 磯太夫がきり
ころされ かたのごとくのありさまにて わるものはやいつのほどにかにげ
て あとさへとめねば たゞぼうせんたるばかりなり

「なにもものゝしわざなるか なさけなきこのありさま いまひとあしはやくん
ばやみ／＼とうたせじものを さんねん／＼」

五の巻 よみはじめ こゝにまたまみゑもんは いそぎこのところをたちいで

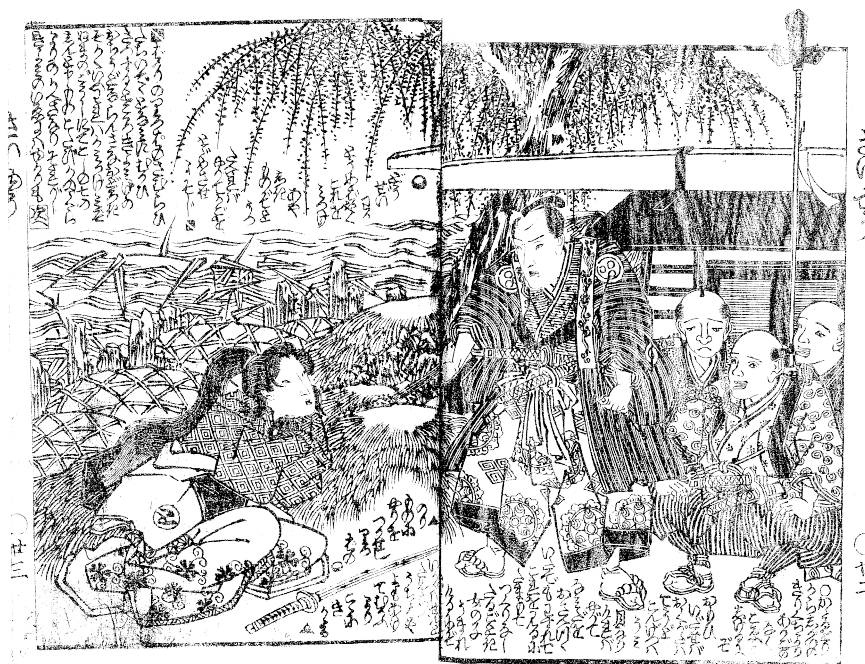
いづくやら山なかにいたりて 手下にむかひ申けるは われふりよにかんき
をかうふりしとはいつはり まことはみほのぐんれうひろうち公おとゝぎみぐ
んじすゑうち公みこゝろをあわせられ こんどむほんのくはだてあり われひ
そかにとうぞくとなりしは みかたをかたらひ ふたつにはぐんよう金をあつ
めんためなり しかるにすゑうちぎみのわかとのは うまれついてもいふこ
とかなはず おゝしといへるなんびやうなり つね／＼これをうれひたまふに



わがめいほうにさるのねんげつそろひたる女子のいきどもをせいほうし これ
をもてあたへるときは びやうきたちどころに ▲へいゆすることあり こ
のたびおさへきたりしは すなはちそのめるなり いでめうやくをとゝのへん
申つたるつぽをいだせと つゞらのふたをひきあくれば おもひよらずいつ
びきのさるとびいづるに 四ほうの山あひたになどより あまたのさるどもむ
らがりて かのしろさるをうやまひしゆごし 山たかくこそはせゆきけり こ
れかのこのはなりけり ○かへつてとく こゝにまたやさしのまへはとなみの
つぽねをめしぐしたまひ やかたをおちさせたまひしが しもつけのくになす
のせうじは となみのつぽねがゆかりあるものなりければ ひとまづかしこへ
いざなひたてまつらんとて いそぎしもつけへゆかんとすみちくも おちう
どありとてゑすがたもてあらためらるればさまくのかんなんをしぎよるの
みおほくたどり給ふに こゝにむさしのくにとだのはらといへる所にて さん
ぞくとおぼしきものどもあまたむらがりいでけるが やがて二人をとりまいて
さんく／＼にきつてかゝるとなみのつぽねは こゝろえたりとたしなむひとこし
ぬきあはせ たせいをあいてにきりむすべば すは女こそとなみとて 男まさ
りのてこわきやつぞゆだんなせと げちをつたへあまさじとこそきり立れど
次へ

二十二丁裏・二十二丁表

つゞき となみがはげしきたちかぜに かなはじゆるせとわるものどもみな
○ ちりく／＼ににげゆくを きたなしかへせとおふてゆく やさしのまへは
こゑをかけ ながおひしてけがしやんな あゝあぶないはようもどりやと○
○よぶこゑひゞくたにまより あらはれいづる大男 てのものひきつれおどり
いで○ ③やさしのまへをいけどつたり④ ④とかゝるをゑたりとひとこしひ
きぬきわるものゝ⑤ ⑤かほううちまもり ヤアおのれはにんびにんのみみゑも
んめ おもひしれよときりかくれば それうちとれといふまゝに あまたむら
がるてしたのさんぞく 四ほうより⑥ ⑥うちかくれば やさしのまへはさき



に④ ⑤みごもりこの月うみ月なりければ いかでたせいにてきすべき つひにさんくきにきりころされ あへなき④ ④くびをとらんとするを とほめよりうかどひ見たるとなみのつぼね いつさんにかかけへし④ ④またさんくきにきりたつれば てなみにこりたるさんぞくども 又もちりくにげうせけりとなみはおくがたをかきいだき よびいけれども こときたるに そのみもすかしよのふかでをうけ せんかたなくもしがいにすがり なくねもほそるばかりなりけり

次へ

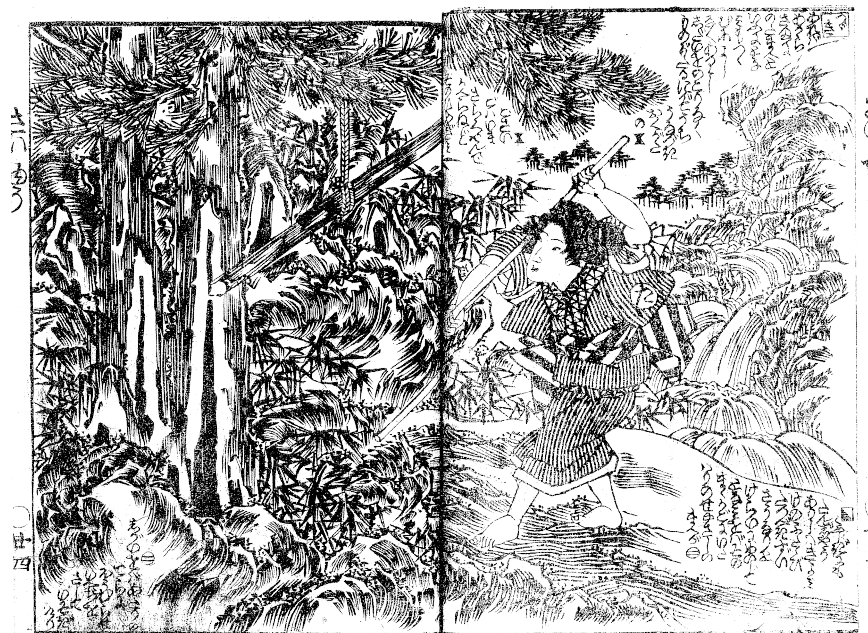
二十二丁裏・二十三丁表

○かゝるをりからしがいのきりくちより あかごのなくこゑしけるにぞ おもひいだせばおくがたは てうどこんげつはうみ月なりければ やがてなみだをおさへつゝ いたでもわすれてこれを見るに たまもてつくりなしたるとき女の子うまれけるにぞ やがてこれをとりあげて いかどはせんとためらふちはやよもあけて むかふよりこゝにきかゝる▲▲のりものに やりをつかせしりつばの●●どうぜい わかとうめばやくこれをみつ け あやしきものぞとうつたへれば やがてかごとめさせ よそじ■はかりのりつばのさむらひたちいでゝとなみにむかひ さつするところきよみけのおちうどならん さなおどろきそ かくいふわれはかみつけみぞぬまのこうしにて こしの七のしんと申もの こたびかまくらよりのかへさなり それがしきよみのいゑにはゆかりも

次へ

二十三丁裏・二十四丁表

つゞき あればあからさまにのたまへといふに となみもつゝむによしなくありししだいをのこりなくものがたるにぞ うちうなづき おくがたの❖❖こさいこはいまさらくやんでかへらねど そのひめぎみ■ふしぎにもたんじやうありしは きよみけのふたゝびたつべきすいさうなりと けらいにめい



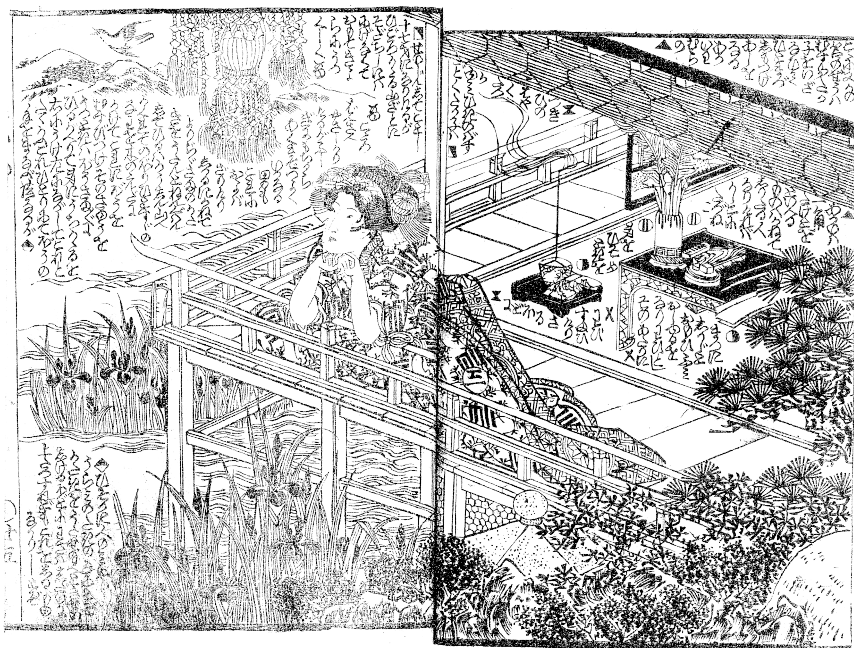
じてとなみをば そのまゝかごにいたはりのせ やさしのまへが○ ○しがい
をば あたりのてらにほうむらせ いへちをさしていそぎけり

△二十四丁裏・二十五丁表

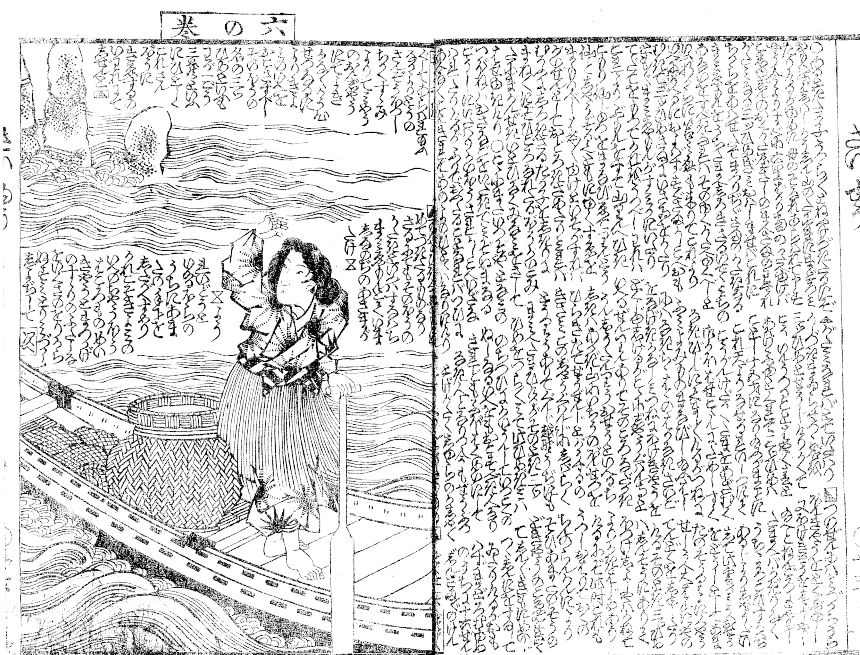
こゝに又かの苦のぜうは むすめたか子をいぎなひて ひとまづしもつけあし
をなるあかいわむらの▲ ▲あかいは一角たけとをといへるものは かねてし
りたる人なりければ かしこにたづねて① ①身をひそめ ときを● ●まづ
にしかじとおもひ ふみおしゆるをなりわひとし そのあたりに× ×わびす
まひけり さるほどに× ×つきひのはやくたつか ゆみひきのばすごとく
たか子は■ ■せいじんして ことし十七才になりけるが ひごろかゝる山ざ
とにそだちしにはにげなくて おもてきよらにうつくしくめめこゝろばへさ
へやさしかりけるが ふしぎにもちからあくまでつよく いかなる男もこれに
およばざりけり しかるにかねてよりちゞさまのかたきをうたんとねんぐはん
して ひるはかうしん山へかくれてのぼり ひとすじのなわを木のえだにかけ
て これにぼうをむすびつけ そのさゆうをうつときは ぼうさま／＼にひる
がへりて 身にうちかゝるを 右にうけ左にながして これとたゝかふ これ
ひとりにてぼうの手をまなぶ法なるが◆ ◆ひそかに人のみぬうらみのたきの
なにとぞかたきをうたせ給へと きせいしけるほどに わさはしだいに上たつ
すれども これをしるものなかりしとぞ

△二十五丁裏・二十六丁表

○あるときたか子うつら／＼とねふけつきたるにぞ おもはずしはしかうしん
山のたにまにまどろみたりけるが ゆめに母のそなれあらはれて申すやう 今
よりすぐに六里ばかり南のかたへゆけば こしゆじんのおくがた屋さしのまへ
さまのわすれがたみなる 三ツひめぎみおはしませば これにちからをあはせ
たてまつり ちゞさまのかたきなるまみゑもんをうちたまへ しろきさるい



で、みちのあないをすべきなれば、そのゆくかたへゆくべしといふ折からに
 苦之丞も来りて、これよりいへにかへるにおよばず、すぐまかしこへおもむ
 きて、三ツひめさまにいさみをかたり、とも／＼まみゑもんがすみかにいたり
 てだてをもつてかれをうつべし、われはこれよりぶもんをすて、山りんへひき
 こもり、仙じゆつをまなびゑて、りんと仙としやうずる也、ともにゆくすゑ
 をまもるべし、はや／＼ゆけといそがすれば、がいぜんとしておどろきさめた
 り、みればむかふにしろきさる、たか子をしきりにまねくにぞ、ひごろなれた
 るぼうかいこみ、たにまがんぜきいとひなく、みなみをさしてはせゆきけり
 ○こゝにまたいつぞや、となみのつぼねはおさなごをいだきて、みぞぬまなる
 ごうしにいたはりかいほうされ、かしこへいざなはれたりけるが、ふかでおふ
 たることなれば、つひにあへなくことされて、あのよのひとゝはなりにけり
 のこるひとりのおさなごは、これきよみの御わすれ▲▲がたみなればとて
 いたはりかしづきまゐらせつゝ、名を三ツひめとせうじけり、かくてこういん
 うつることはやく、春とあけふゆとくれて、三ツひめはことし十五才になり給
 ふが、まことにこれ天よりなせるれいしつにて、こうがんけだかく、たまをあ
 ざむく御かほばせ、こゝんにためしすくなきびんにてまし／＼けるが、つね
 にふみよみのまなびし給ふはしには、なきちゝはゝのはかなきさいごをなげ
 きかなしみ、つねにほけきやうをどくじゆしけるが、こゝにじやうぐはん寺と
 いへるぜんりんありて、そのころなだかきうんしうたんりうおせうといへるち
 しきは、あかぎ山にいちうのぼんせつをひらきたて、せうぜんじとがうするの
 きさみ、このじやうぐはんじにしばらくとうりうありて、ぐんじ越野うちにも
 まみへたまひけるが、そのとき三ツひめをつら／＼みて、此ひめぎみはのちつ
 ひにかいいうんして、いつこくのぬしなるいへをもおすべき人なり、されども
 ふぼはくめいにして、なき人となりつ、今もぜうぶつとげかたく、しゆらのか
 しやくをうくる也、そのためなる■■ついぜんにはみづからうらぼんきやう
 をとくじゆし、又ほけきやうをしよしやし給へと、ねんごろにしめたまへば



かぎりなくうちよろこび すなはちあるじよりしやうだいして 此雲りうおせ
うをどうしとして あまたのそうりよにくやうせしうへ 大はんにやのてんど
くをしゆしたりける そのとき三ツひめはしんそうにありて ほつけしよしや
はかねてよりかきはじめありけるにぞ 此時これもうつしおはりて おくのち
んのらんかんによりそひ あまたのそうのときやうのこゑをきゝて しんく
きもにめいじつゝ しんにをすましてあたりけるが おもはずまどろむゆめの
うちに 十六せんじんさまくのけんぞくを 六へつどく

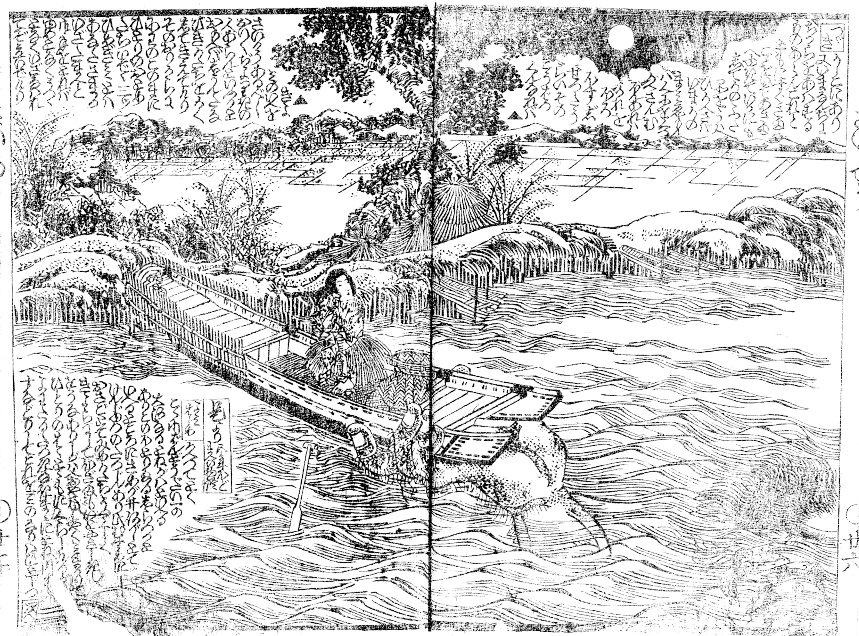
六の巻 五よりつゞき ぐしてあらはれ給ふなかより とうのさんぞうほつし
ちかくすゝみよりてみめうのおんじやうにて よきかなく かう心せつなる

により きよみのいへをおこさすべし そのほうの名の三ツひめといふも わ
が一ごう三蔵といふにひとしく これさんぼうにきゑするのいわれにて しぜ
んと ぬんをひきくわをもとめてつきたるものなり さるにてもそのほう

のかたきといふはすなはちまみゑもんとて いましなのちのあさまがたけ ふう
ようれいどうといへるほらのうちにあまたの手下をしたがへすめり かれこそ
きよみのいへのちやうほう はころものめいきやうとまつかげのすゝりのふた
しなをいくさのりからぬすみとり みづからしやうして 次へ

二十六裏・二十七表

つゞき かしこにあり 又いまなんぢにちからをあはするものあらん これと
ともにすぐさまこゝをいで あさまへゆきていかにもして かふた品をうは
ひかへさば いまかのみゑもんはくにくつがへさんむほんあれば かれを
ほるほすじせつたうらい そのこゝばつくんなれば ぬんをひきくわをきい
かうあるべし おい／＼ちよりきの人あらんといふかとおもへばしうんたなび
き かたちをかくしてきてけり そのおりからに にわのこのまにひとりの
おとめたちいでゝ 三ツひめきみとはあなたださまか いざたまへと御手をとれ
ば ゆめとなくうつゝとなくいざなはれてぞ立いでけり 是より五年ほどまへ



物語

よみはじめ

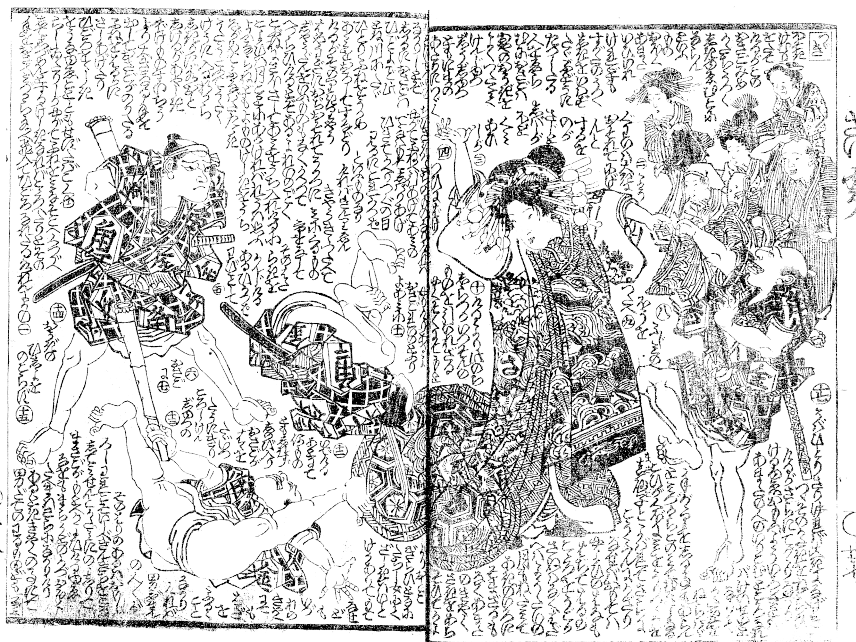
かへつてとく こゝにばんだうだい一の大河なるとねが
はといへるあり このほとりなるしらつかといへるところに さめが井何がし
とて けんじゆつのたつじんあり 此むすめにおきごとて みめかたちうつく
しくきよらにして 心さまもいとやさしきをうなありしが 父おやはやくみ
まかりて ひとりのはゝともにくらしけるが よわたるたつきなきまゝに
とね川にすなどりしてこれをみのなりはひとしつ

次へ

二十七丁裏・二十八丁表

つゞき

ほそきけむりをたてけるが このおさこみめかたちうつくしきゆゑ
むこにならんといふものおほく あまたいひいれけれども すがたのうつくし
きをいはず たゞぶどうにたつしたるひとをゑらむに おさこはおやのおうぎ
をよくつたへて けんじゆつじうじゆつともにまのあたりにつゞくものなかり
ければ むこにせんものなかりしとぞ しかるにおさこはひとよごと 此と
ね川にたゞひとりふねをうかめ あみをおろしてすなどりけるが そのりきり
やうはやわざにおちおそれて うかつにじやうだんをいふものもなく かへつ
てへつらひけるとぞ あるよれいのごとく こぶねにさほさしてあみをうち入
れるに こよひは月ことにあかければ れうは思ふよふならねども よもの
けしきをうちながめて ふなばたたゞきうたうとふてうたゞけうに入る 折か
らしきりに水おとしけるが あやしきばけものすいちうより大きな手を出し
て おさこがのりたるふねをはるかにさしあげたり ひごろをゝしきをうなゆ
ゑ ことともせず たばこくゆらしめたりしが やがてふねをみなそこへくつ
がへして しづめんとするけしきなれば こゝろへたりとその手をおさへみ
づから水へ飛入て ひごろなれたる水れんに かの○ ○ようぐわいは大きに
おそれてにげんとするを のがさじとしばしがほくみあひしが● ㊦つひに
ばけものをとらへけるに ちひさきかたちのものなりければ やがてふねへ引
あげて あみのてなはもてしぱりあげ ひきてかへりつぐの目見るに これか



つばといふものなりければ きんりゑんきやうきゝつたへてみにくるもの市を
 なして そのはたらきをかんじける あるひかつばわびことして⑤ ⑥おきこ
 に④ ④ふじみのほうをつたへ④ ④けるより 此のちしらつかいつそのもの
 のを引いれざるやくそくにて もとのかはへはなちやりけり あるよおきこれ
 いのとふりよあみに① ①いでけるあとにて 何ものとしれずしのび入
 り おきこがはゝをたゞいつたうにきりころし けんじゆつの③ ④おう
 ぎのひしよをのこらず⑤ ⑤うばひとりさりければ 大きになげきつゝそ
 のかたきをねらひけるが さらにてがゝりなかりけるゆゑおもふよう いろざ
 とはあまたの人のいりこむところなれば けいせいとなりてかたきをねらはゝ
 手がゝりをする事もあらんと みづからこのみてむさしなるこひがくぼにみを
 うりつゝ なを真砂子とよばれて さらにこうふんにかざりなせば おもては
 やよひのはなもはちてはるのころをうごかさぬはなく はだへはようたいの
 月もねたみてあきのいろにそまざるもなく あまたのきやくさきをあらそひて
 かよへども もとよりおとこざらひとなにたちし女にて ざしきはいとけうあ
 りてもてなせども いづれのきやくにてもはだをふるゝことなかりければ 男
 じまんの人ゝが そのはりのあるはおもしろし われこそいしべんきちを
 ころしてみせんと かたみにのゝしりて まさこがもとへかよひけるゆゑな
 をもまらうどのかづおほく たへまはさらになかりけり あるとききやくの事
 にて 男だてのわるものども

つぎへ

二十八丁裏・二十九丁表

つゞき まさこをばつかしめんとさまゝにあくこうなし あまつさへらうせ
 きにおよびかけれども さらに心にかげずのがれんとするに わるものともは
 あとおふてひきとらへ わかいものやりてなどをてうちやくし すでにまさこ
 にうつてかゝるをこらへかねてあたるをさいわひ なげつくれば わるものと
 もはそのてなみのぼんにんならぬはたらきにいちゝんもなく ちりゝにあと



もみずしてにげ行けり かたへのせうぎにこのていをみてゐたりしは 此わる
 ものどものかしらかんざへもんといふもの はしりよつてまさごがうでくびし
 つかととる ことともせずしてなげつくれば これまでなりとかんざへもん
 かなたなひきぬき切かくる身をはしてありあふぎせるにてうとうけ 女とあな
 どりぶれいしてけがしやんすなといふまもなく またうちかくるしゆれんの
 きつさき こなたも ▲きせるのひばなをちらし ひいてかまふるせいがん
 に すかさずつけ入るこらのきつさき おこすたち風すさまじく うてばひ
 らき はらへばつけ入るそのかまへを ■まさごはきつとみて はてこゝろ
 へぬ わがいはにつたへたるねんかうあんなの人ならではしることあらぬ中だ
 んのかけはしげだんのむがまへ さすればたづぬる ヲ、金角大王とはかりの
 名 われはくま山まみ多もん なんちが ①おやをうつておうぎのひしよを
 とつたは此方 かへりうちとおもひのほか 手ごわき女 しばしがうち○ひ
 たすけてくりやう そのけといふをりからに さきほどよりけんくわく／と
 わめきたて あまたの人／＼いであひしが ふたりがはげしきたゝかひに さ
 うなくはよりもつかずけんぶつしてゐたりしが まさごは大ききよるこびて
 今こそかたきを ◆うちとるじせつ かたじけなしと ふところよりたんと
 うぬきもちきりかくるに かたきは手にいんをむすびくちになふるじゆもん
 とともに くるくもひとむらまひさがり すがたをつゝみてそらたかく きた
 をさしてぞとびさりけり まさごはみるより ▲きやうきのことくそのくろ
 くもをめあてにて あとをしたふておふてゆく はや日もくれてそらくらく
 つひにまみ多もんがすがたを見うしなひたりけるが かねてかつはよりつた
 はりたるふじみのほうをもちゆるゆへ かちはだしにてもすこししいとはず
 いづれにまれ北のかたなり いそがばなどかおひつかざらんと ちうをとんで
 ゆくところに むかふよりいつひきの馬とびきたりて みちをふさげり まさ
 ごはいとゞきをいらち じやまなせそとよけんとするすれども ゆくさきにま
 つわりてさらにうごかず 折からさしでる月かげにこれを見れば たづなのも



やうくらあをりまで わがいへにつたはりし古画の馬にすこしもたがはず ひ
 ころそのみをはなさざりければ こころえずとくわいちうよりとりいだしおし
 ひらけば こはふしぎや ゑがきし馬はきりぬきしごとく ぬけてあとさへ
 とどめざれば こはたしてめいぐわのきどくにより わらはをたすけんとす
 るにこそと いとゞうれしく かの馬にうちのれば 馬はそのまゝとびいだし
 ちうをとんでまたゝくひまに 山をこへ水をわたりて こゝなんかみつかけあ
 ぎ山のふもとなる ゆのさわといふところにいたりぬ こゝにあかぎのゆとい
 ふおんせんあり 此あたりにかの馬とゞまりしかば こゝろえずもおりたち見
 れば むかふに女二人立たり ちかよいてそのよしをとほんとするに その人
 〳もうちおどろきたるおもゝちなりけるが やがてこのところへかた手に女
 をおさへて来たるひとりのらうじんあり その女はこゑのかぎり のふゆるし
 てよとなきわぶるを

つぎへ

〇鳥寒左工門一名金角大王となる男伊達金角組の魁首にて遊所に徘徊す
 鯨が井の家の重器 荻原東溪の筆 白馬の図 古来より伝ふるが故に氏号を白
 馬井と書たるを 後に鯨の字に改む 沙漠神龍変白馬 貞齊書 東溪星野氏於
 鎌倉 鳥川老人二画法ヲ学ブ 当時之名人也

二十九丁裏・三十丁表

つゞき きゝもいれずにこゝへひきすゑ 三ツひめにむかひていふやう なん
 ぢよくもさんどうほつしのことにはしたがひ あさまの山にかくれすむまみゑ
 もんをたばかりて いへのたからをとりかへし かたきをほろぼす大こうをお
 もひたつことしゆせうなり たかこがためにもかたきなれば いふにおよばず
 又おさこにも母のかたき これよりこゝろをあはせて三ツひめをかしづき と
 もにぢよりきいたすべし またおいのはその身女にしてせつしやうせしつみく
 わう大なりといへども これより三ツひめにしたがひて しなのちにおもむく
 べし そのしきいはなんぢが父はもときよみのけらいにてありしが さきのと

政文士戊子

忠臣前々孝記 金冊 國貞画

繫馬七男傳 金冊 國貞画

今昔盧寶錄 金冊 國貞画

風俗女西遊記 金冊 國貞画

正木製衣十篇 金冊 國貞画

代夜待白 金冊 國貞画

花角力 金冊 國貞画

壁畫神心 金冊 國貞画

今昔盧寶錄 金冊 國貞画

風俗女西遊記 金冊 國貞画



南仙笑楚満人作

しらうにんし かりうどなりける也 さればちからをあはせて大あく人まみ
 多もんをほろほすべし されどもかれは▲まほうをもつてひぎやうしじざ
 いをなすゆへに よういにうたんはかたかるべし われなんちらにしゆこをく
 わへ いまよりなほ大りきをいださすべし 又三ツひめにはひみつのはくのは
 うをさづけんとて ひそかにこれをしてんし給ひ これをとふるときはよく
 人をしてはたらかせず みをばくしてうごかしむ このなを定心しんこん
 とも△△いへり ゆめ／＼うたがふことなかれと いふかとおもへば風につ
 れてこくうたかくあがり給ふ そのさまはこれくわんぜおんにてありければ
 四人はしん／＼きもにめいじ ふしおがみつゝしたくして これより三ツひめ
 を馬にのせまいらせ しなのちへこそおもむきけり

三十三裏

○まみ多もんはこれよりあさまのすみかにいたりけり こゝにはあまたのびぢ
 よをあつめ ちうやいんしゆにふけりて ひそかにみかたをあつめ むほんの
 くはだてしきりなり ○此のちかの四人の女みち／＼さま／＼のことありて
 かんなんもしひとたびはみちにまよひ しん山にてわかれ／＼になり のちは
 またくわんぜおんみちびきてあさまにいたりてすがたをかへ 女太夫となり
 あるひはさるひきとなり またはあさまといへる上るりをかたりてそのこゝろ
 をとらかさんとすること まみ多もんこれをしりてせきもんをとさし たゝか
 ふてつひに四人にきりたてられ 又こゝをにげいだし おんたけの山にこもる
 に 苦之丞仙じゆつをきて△△まみ多もんをなやます そのゝちまみ多もん
 かくれてかまくらへにげてすむとき 三人の女はげいしやとなりてこれをねら
 ふことより むほんのくはだてもれきこへて うつての事のち三ツひめのため
 にほろぶるまでは ことながりり そはこうへんをまつて見たもふべし ○こ
 れまではみなさいゆうきのほつたんにかくれり これよりおい／＼さま／＼の
 しゆかういづれば のちのまきをもてまことのさいゆうきとてらしあはせ見給

へかし ○御くすりはみがき 丁字くるま 楚満人店 南仙笑楚満人作 歌川
国安画 浄書音成

〈広告〉

文政十一戊子 新雕絵○

曲亭馬琴作

代夜待白女辻占

全六冊

歌川国貞画

花角力恋乃百草

全六冊

志満山人作
歌川国信画

蓬萊山人作

全六冊

歌川国貞画

璧談艸心の種本

全三冊

英笑画

忠臣前々孝記

全六冊

英笑画

南仙笑楚満人作

四／編 六冊

溪齋英泉画

今昔虚実録

全六冊

桜川慈悲成作
哥川豊国画

繫馬七勇婦伝

柳亭種彦作

大人／於七を／織女に／準

返す／丸に文月

五渡亭国貞画

風俗女西遊記

全六冊

国安画

美艷仙女香

御顔のくすり／南伝馬町いなり新道

正本製十編

六冊

柳亭種彦作

／坂本氏製

江戸問屋 馬喰町式丁目角

永寿堂 西村屋與八

二 今回掲載部分の梗概

そなれは高子を抱いて物陰に入り、泣きながら自分が苦之丞に救われた猿であること、磯太夫が来た以上そなれの姿でいることは出来ないことを語る。磯太夫が室内に入ると、行灯に一首の歌を書き付けて、そなれは消えていた。そこへ帰宅した苦之丞は、磯太夫からそなれが既に死んでいることをきかされる。残された歌を読んだ二人は、猿の木の葉がそなれの姿となって高子を生み、今「浦見の滝」の故郷へと帰って行つたことを知る。そこへ突然、代官所よりの使いと称する男が現れ、苦之丞を連れて行く。高子をあずかり家に残つていた磯太夫は、曲者に急襲され、高子を庇つて傷を負う。曲者は三保の郡領供氏の家臣熊山まみ衛門と名乗った。熊山の弟はそなれに恋慕して拒絶され、やむなく殺したところを磯太夫に見付かり、討ち取られていた。弟の敵である磯太夫を殺した熊山は、高子連れ去る。そこへ帰宅した苦之丞は、磯太夫の亡骸と我が家の惨状に呆然とする。熊山は申の年月がそろつて生まれた高子の生き肝を、三保の郡領季氏の若君の病を治すため、求めていた。高子押し込めていた葛を聞くと、中から白猿が飛び出し、群がつて来た多くの猿に守護されて、山中へ去つて行つた。

清見家の奥方やさしの前はみごもつた身体のまま、となみの局に守られて逃げていたが、山賊に囲まれ斬り殺される。となみの局はやさしの前の亡骸から、産み月になつていた赤子の姫君を取り上げ、通りがかつた上野溝沼の郷土越野七之進に保護される。

苦之丞は高子連れて、下野足尾赤岩村の赤岩一角のもとに身を寄せていた。月日過ぎて高子は十七になり、容貌美しく、心やさしく、しかしどんな男もかわぬほど力の強い娘に成長していた。ある日高子は庚申山の谷間でまじろみ、夢中で母のそなれより、亡き主君の姫君三ツ姫と、祖父の敵熊山の存在を知らされる。夢中には父苦之丞も現れ、自分は仙術を極める修行に出るので、三ツ姫のもとへ行つて力を合わせ、熊山を討てと命じる。目覚めた高子は白猿に導かれて行く。

となみの局が育てる三ツ姫は十五歳になっていた。父母の菩提を弔うため赤城山のしょうぜんじに籠って写経をしていた。まじろむ夢のうちに三蔵法師に会い、敵熊山がお家の重宝の二品を隠していることを教えられ、清見家再興を示唆される。目覚めた三ツ姫の前に、高子があらわれる。

五年以前のこと。利根川のほとり白塚に、醒ヶ井某という剣術の達人がいた。その娘おさこは容貌うるわしく心やさしい娘であったが、父を亡くしてすなどりを稼業としていた。縁談は多くあったが、剣術柔術にすぐれたおさこの相手はいなかった。漁の邪魔をする河童を生け捕ったおさこは、不死身の術と引き換えに逃がしてやる。ある日、留守の際に何者かに母を殺され、奥義の秘書を盗まれたおさこは、敵をさがすため恋ヶ窪の遊女となつて真砂子と名乗る。美貌と男嫌いで知られた真砂子は、男伊達の悪人に襲われるが、撃退する。悪者の頭寒左エ門が刀で切り掛かるが、そのかまえから、奥義を盗んだ敵と知る。寒三エ門実は熊山を真砂子は討ち取ろうとするが、逃げられる。後を追う真砂子ことおさこは、懷中の古画からぬけ出た馬に乗って赤城山湯野沢へ付き、二人の女子と出会う。そこへ一人の老人が女を伴って現れる。老人は三ツ姫、高子、おさこの敵が熊山であることを告げ、連れて来たおいのに、亡き父の主君にあたる三ツ姫に従うよう言う。さらに三ツ姫には秘密の縛の法をさずける。老人は虚空にあがって観音に変じた。

この後、浅間山にこもった熊山をばらばらに四人が攻め、さらに熊山は御岳山へ逃げ、芸者に変じた三人の女が攻め、三ツ姫は失望を果たす。それまでまだまだ長く、これは発端に過ぎない。

三 本書の特色―人物について／中断について

今回は後編十五丁分の翻刻と図版を掲載した。主な登場人物が出揃い、末尾では後の展開が予告されているが、続編が刊行された形跡は無い。『風俗女西遊記』

は、旅に出る前段階にあたる今回掲載分をもって中断している。理由は不明であるが、文政期末に火事にあい、天保期に入ってから人情本を主にし、『春色梅児誉美』シリーズが当たつて多忙を極めた為永春水が、合巻執筆から遠ざかったことは想像できる。同時期に刊行して四編まで続いていた『繫馬七勇婦伝』も中断している。

今回は主な女性登場人物が出揃ったので、それぞれの人物像を整理し、典拠『西遊記』とどのような関わりがあるのかを指摘しておきたい。

『日本古典文学大事典』(小学館)によると、『西遊記』は室町末期から日本に伝来しており、宝暦八年より和訳された『通俗西遊記』が出されている。文化三年より、これを絵入り平仮名まじり文にした『絵本西遊全伝』が出ており、合巻『風俗女西遊記』刊行の文政年間、読者にとって『西遊記』もまた、身近に触れることのできるものであったと考えられる。

人物について

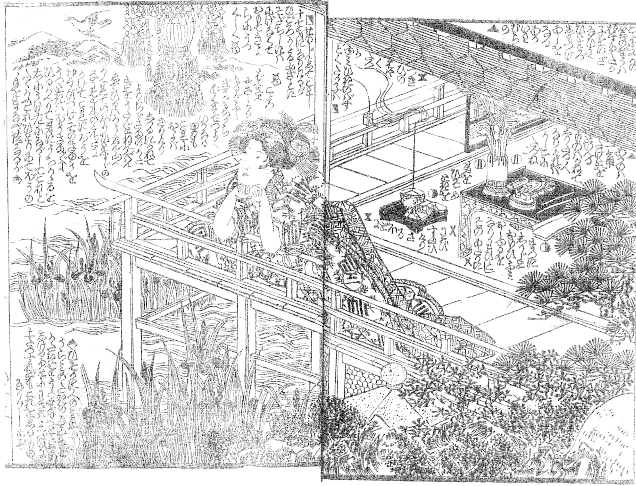
前号において、口絵から『西遊記』の登場人物との対応が窺えることは指摘しておいた。三蔵法師―三ツ姫、孫悟空―高子、沙悟浄―おさこ、猪八戒―おいのである。そして旅の際に三蔵を乗せる馬は、本作ではおさこの所持する絵から抜け出したものと設定される。それぞれの人物像を、典拠『西遊記』と比べて、個別に述べて行く。

■ 三ツ姫

悪臣三保の郡領兄弟のはかりごとで滅びた清見家の姫で、母やさしの前が討たれて亡くなった際、その胎内から誕生した。上野の国にて成長し、両親が亡くなっていることから、仏道に深く心を寄せて供養するうち、夢中に三蔵法師が現れて清見家再興と敵熊山まみ衛門の存在を示唆される。

死人の胎内からの誕生という設定は、何らかの宿命を負っていることをにおわせる。仏道に深く心を寄せることは、三蔵法師にあたる人物であることを示しているが、何より強く関係性を示すのは、夢に三蔵法師が現れて諸事を告げ知らせるという部分である。本文中にも「そのほうの名の三ツひめといふも わが三蔵といふにひとしく これさんぼうにきゑするのいわれにて しぜんとゐんをひきくわをもとめてつきたるものなり」(二十五丁裏・二十六丁表)とあって、その縁の深さを示している。また縛の法をさすけられるのも、三蔵法師が孫悟空を戒める法を身につけていたことに対応している。

二十四丁裏・二十五丁表 寺にこもった三ツ姫の様子



深窓に育ち、学問を好み、亡き父母の菩提を弔って仏道に心を寄せる、気高く学識豊かな美しい姫。三蔵法師の女性版という設定にふさわしい人物である。

■ 高子

二十三丁裏・二十四丁表 高子が棒術を稽古する様子



人である浦松苦之丞と、猿の木の葉との間に生まれた、怪力の持ち主。心優しく美貌の持ち主。白猿に守護されている。母は猿の姿に戻って故郷で暮らしている。下野赤岩村にて育ち、祖父の敵を討つため一人山中にて棒術の稽古をする。夢中で父母より三ツ姫の存在を知らされ、白猿に導かれて巡り会う。

実母が猿であるという設定は、孫悟空との関連を示す。母との別れは浄瑠璃『盧屋道満大内鑑』などで知られる、安倍晴明と実母の狐のエピソードをふまえている。家族の来訪で正体が知れ、歌を書き残して消えるところ、また別離の際に残した歌まで、安倍晴明と母葛の葉の別れをなぞっている。

「猿」という動物、棒術の使い手であることが孫悟空と共通するが、性格はかなり異なる。乱暴者で気性が荒く、三蔵に従いにくかった孫悟空に比べ、高子は力こそ強いが、やさしい性格とされている。祖父の敵討ちという明確な目標を持ち、一人山中にて棒術の稽古をする意志の強い人物であるが、女性らしい華やかさも持っている。孫悟空と性格的な点では少し距離を置いている。

■ おさこ

美しくやさしい剣術柔術の達人。父亡き後は漁師をしていたが、母を殺された上、父伝来の奥義書を盗まれ、敵をさがすため遊女となった。命を助けた河童に不死身の法を習っている。

他の人々と違い、夢中の啓示等は受けていないが、熊山まみ衛門が母の敵であることを知っており、家玉の絵から抜け出た馬に導かれて高子・三ツ姫に出会う。本作の女性の中で、最も戦う姿が多く描かれており、絵からも勇婦であることが印象付けられている。美貌と武勇を兼ね備えていることは、二十七丁裏二十八丁表の、遊女姿で男伊達を次々と投げ飛ばしている場面が象徴的に示している。また、川で漁をしていた際、河童に戦いを仕掛けられて、少しも慌てず逆に生け捕ってしまう場面は、絵によって示される。二十六丁表には、舟を操って漁をするおさこの前方に、大きな掌が突き出している。そして丁をめくった二十六丁裏

二十七丁表には、おさこの乗る舟をつかんでいる巨大な手が描かれる。本文にはこれが河童のしわざであることが述べられているが、絵に河童の姿は無く、この巨大な手がおさこを襲った災難を示すのみである。おさこは慌てずこれが河童のしわざであることを見抜き、捕まえて服従させる。

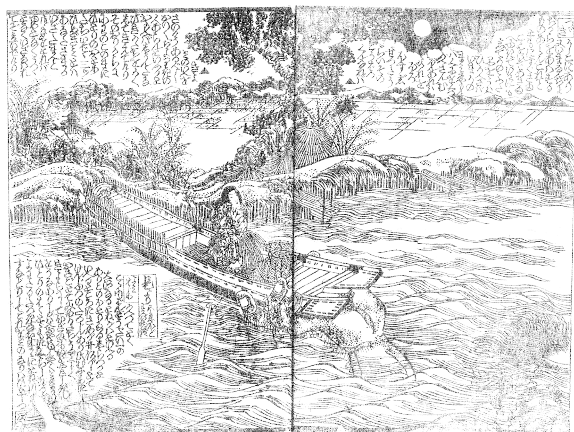
二十七丁裏・二十八丁表 男伊達を投げ飛ばす遊女真砂子の様子



二十六丁表
水中より突き出た手



二十六丁裏・
二十七丁表
船をつかむ手



漁師という水辺の労働に従事していたこと、河童から授かった術を使うこと等が、『西遊記』の沙悟玄との関係をにおわせているが、その他の関連は薄い。しかし美貌で剣術柔術の達人、遊女の姿で男伊達を投げ飛ばす鮮やかさ。印象的で魅力的な人物である。

■ おいの

獵師の娘。父が清見家の家臣であったことから、観音によって連れて来られ、一行の仲間入りをした。容姿、人柄についての言及が本文中に無いが、口絵で見ると他の三人より少し年下らしく、少女の姿をしている。また獵師であるため、二十九丁裏では着物の上に毛皮をまとい描かれている。

父が清見家の家臣であったため、浪人して獵師になったこと以外、三ツ姫に従う理由はこの時点で述べられていない。他の三人に親や親類を殺された敵討ち等の理由があることに比べると、熊山まみ衛門を討つ理由は薄い。登場が二十九丁裏と遅かったためか、存在感もまだ薄い状態である。

狩人という仕事、毛皮をまとった姿が獣のイメージを付加しており、『西遊記』の猪八戒との関連を窺わせるが、作品中での存在自体がこの時点では薄く、人数合わせのために登場させた人物に思えてしまう。

この他、清見家の敵である三保の郡領が「兄弟」であり、家臣である熊山まみ衛門が「金角大王」と名乗るところから、『西遊記』で一行の敵となる金角・銀角兄弟を意識していることが窺える。しかし翻案と言えるほど色濃く反映しているわけではなく、どことなく匂わせる程度となっている。

『西遊記』の影響が感じられるのは、人物の設定と個々の性格の要素程度であり、全体的には薄いと思われる。しかし本作『風俗女西遊記』の人物、とくに三ツ姫・高子・おさこの三人は、それぞれ別の魅力を持った美女として描かれており、読者の興味を引く登場人物である。三ツ姫の高貴な気高き、高子の忠義心と力強さとやさしき、おさこの美貌と気の強さと剣術柔術の腕前といった人物の性

格の中心を成す部分は、本書の作者が独自に加えた部分と言って良いと思われる。

中断について

本書『風俗女西遊記』は、この巻をもって中断している。しかし今後の展開のおおまかな構想はあつたらしく、三十丁裏にそれが記されている。その部分を引用して、今後の展開を確認しておく。

○此のちかの四人の女みちくさまくのことありて かんなんもしひとたびはみちにまよひ しん山にてわかれくになり のちはまたくわんぜおんみちびきてあさまにいたりてすがたをかへ 女太夫となり あるひはさるひきとなり またはあさまといへる上るりをかたりてそのころをとらかさんとするこゝと まみゑもんこれをしりてせきもんをとざし たゝかふてつひに四人にきりたてられ 又こゝをにげいだし おんたけの山にこもるに 苦之丞仙じゆつをゑてまみゑもんをなやます そのゝちまみゑもんかくれてかまくらへにげてすむとき 三人の女はげいしやとなりてこれをねらふことより むほんのくはだてもれきこへて うつての事のち三ツひめのためにほろぶるまでは ことながゝり そはこうへんをまつて見たもふべし ○これまではみなさいゆうきのほつたんにかくれり これよりおいくさまくのしゆかういづれば のちのまきをもてまことのさいゆうきとてらしあはせ見給へかし

あと三、四編は続きそうな筋の構想があつたことがわかる。また傍線部に注目すると、『西遊記』を意識して書かれていたこと、読者も『西遊記』と比べつつ読んだであろうことがわかる。本書が世に出た文政十年前後、『西遊記』が和訳され簡易化された『絵本西遊全伝』によって既に読まれていたことは先に述べた。おそらく、人物の描き方がそうであつたように、『西遊記』の要素を匂わせつつ

も、独自の創作を入れて話を続けるつもりであつたのだろう。

話の舞台も上野・下野だけでなく、御岳山、最終的には鎌倉へと移る予定であつた。一行の女性たちは、浄瑠璃語りや芸者に身をやつし、熊山を追いつめてついに敵討ちを果たす予定であつた。このような展開は、同時期に作者春水が刊行していたもうひとつの合巻『繫馬七勇婦伝』（本書の巻末、西村屋の広告にその名が見える）と良く似ている。

この時期、『水滸伝ブーム』があつたことは既に指摘があり、舞台を日本に、人物を女性にして翻案する作品の魁としては、曲亭馬琴の合巻『傾城水滸伝』がある。同じく『西遊記』も翻案されており、曲亭馬琴の合巻『金比羅舟利生纜』（こんびらぶねりしょうのともづな）（文政七年―天保二年）が良く知られている（『日本古典文学大事典』による）。『風俗女西遊記』は、決して目新しい作品ではない。しかし作者が作り出した人物は、想像力をかきたてる魅力にあふれており、絵で示される話の場面は、読者に人物の活躍を生き生きと示す。親族の敵討ちを主な目的に集まつた一行の女性たちが、どんな事を考えつつ、華麗な場面を繰り広げる予定であつたのか、知り得ないのが残念である。

本書の図版、翻刻の掲載を許可していただいた国立国会図書館に深く御礼申し上げます。

【公開論文についての補足事項】

- ・論文執筆にあたっての凡例については、次頁以降の『叢』見返しを併せて参照されたい。
- ・論文発表時の訂正事項については、次頁以降の正誤表を参照されたい。

・原稿内で原本画像を表示しているものについては、東京学芸大学リポジトリからの公開にあたり、原本所蔵先より改めて掲載許可を得た。掲載をご許可いただいた関係諸機関には、ここに記して深謝申し上げます。

・原本画像、参考図版を非表示にしているものについては、原本画像公開先（ホームページアドレス）及び掲載資料を該当箇所に示した。併せて参照されたい。

本書は、平成24年度 科学研究費補助金 基礎研究（C）（一般）「近世中期子ども絵本の分析による伝承文化研究」に基づく研究成果です。



複写部分は、東京都立中央図書館加賀文庫、東京大学総合図書館、国立国会図書館、宇部図書館、酒田光丘文庫、舞鶴市郷土資料館、祐徳稲荷文庫、国文学研究資料館、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館のご所蔵書を利用させていただきました。

各位のご厚意に深謝申し上げます。


凡 例

一、各丁は、片面あるいは見開きごとにまとめて丁数を示し、上段に原本の影印（写真版コピー）を、下段にその文字部分の翻刻を示した。

二、翻刻は、紙面の許す限り、原本の文字遣い、表記記号、及び文字の位置を忠実に再現した。また、以下の原則に基づいた（ただし、この凡例と異なる場合は、翻刻者がその原則を個々に示した）。

- （1）文中における片仮名「ミ」「ハ」「ニ」「ワ」及び合字「」「」は、それぞれ「み」「は」「に」「わ」、「より」「こと」と平仮名で表記する。
- （2）感動詞として意識的に用いられていると思われる片仮名「エゝ」、「アレ」などは、原本のまま片仮名で表記する。
- （3）漢文訓読体の送り仮名や、捨て仮名として用いられている片仮名は、原本のまま片仮名表記とする。
- （4）異体字及び旧字体は、現行標準字体が明らかなものはそれに改めて表記し、特殊なものは原本に忠実に表記する。
- （5）「兵へ」「右エ門」「左エ門」などは、それぞれ「兵衛」「右衛門」「左衛門」と表記する。
- （6）その他、特殊なものや文字に意識的な意義付けがされているものは、原本に忠実に表記する。

三、翻字において使用した記号は、以下の通りである。

- （1）翻字不能の箇所は、その文字数だけの○印で示した。
- （2）判読不能の箇所は、「○○○○」「」で示した。
- （3）翻刻が不確かな箇所は右側に傍線を付した。
- （4）判読不能ではあるが、典拠との比較や前後関係から推定した箇所は（ ）で示した。
- （5）判読不能ではあるが、他本との比較によって推定した箇所は「」で示した。
- （6）各作品ごとに使用した記号については、その都度示した。

四、今日用いるにはきわめて不適切な言葉が使われている場合があるが、作品の持つ資料的意義、及び歴史上の言葉といった見地から、敢えて変更等をせず、そのまま使用した。

※今年度は、東日本大震災後の状況を鑑み、東北大学附属図書館の現地調査を行いませんでした。

頁	行	種 類	内 容
四一	下二三	訂正	億 ^レ 度 ^レ ↓ 億 ^レ 土 ^レ
五一	下六	追加	よう ↓ ように ^レ
五二	上二五	追加	大江 ↓ 大江 ^レ 山
五六	下六	訂正	詞 ^レ 書 ^レ ↓ 詞 ^レ 章 ^レ
六一	上二〇	削除	むしろの ^レ 上部 ↓ むしろ上部
六四	下二二	訂正	櫛 ^レ を指 ^レ して ↓ 櫛 ^レ を差 ^レ して
六六	上二一	訂正	上人・照手姫は ↓ 上人 ^レ 照手姫は
六六	下二二	訂正	以外な ↓ 意外な
七七	一丁表	訂正	まめんをたず ^レ ねや ↓ たづ ^レ ねや
九一	下二六	追加	『歌舞伎年代記』(日本古典全集第三期第四 立川 馬場著 正宗敦夫編纂校訂 日本古典全集刊行会 一 九二九年)
九四	上二六	訂正	「神鳴」 ↓ 「神鳴」
九四	下二二	訂正	(右に同じ)
九九	上二五	訂正	慶応義塾大学出版界 ↓ 出版会
一一八	上二二	訂正	寒三 ^レ エ門 ↓ 寒左 ^レ エ門
一一八	上二四	訂正	付き ↓ 着 ^レ き
一二四	上九	削除	一丁半分 ↓ 一丁分
一二四	上二三	削除	三七丁半 ↓ 三七丁
一二五	上五	訂正	息 ^レ ↓ 息 ^レ
一二七	上四	訂正	兒女 ↓ 兒女 ^レ
一三三	下三	追加	弛 ^レ りし ↓ 弛 ^レ かりし
一三四	下二	訂正	先陣 ^レ ↓ 先陣 ^レ
一四三	下六	訂正	去 ^レ ↓ 去 ^レ